

子どもの栄養 今なぜ必要なのか

高増哲也

神奈川県立こども医療センター地域連携・家族支援局

超高齢社会を迎えたわが国では、健康寿命の延伸が重点課題とされており、生活習慣病（non communicable disease:NCD）の予防に注目が集まっています。一方で、それにいつから取り組むべきなのかについては、小児期、さらには胎児期からであるという議論もみられており、小児期の栄養環境がその後の人生の健康の基礎となっていることが明らかになってきています。また、栄養素といわれる物質が、遺伝情報のスイッチのオン・オフにかかわっていること、すなわち情報の制御の役割を果たしていることが明らかになってきています。この特集では、健康にとって不可欠な要素である栄養について、小児科医として知っておくべきこと、明らかになってきている最新の情報、子どもをめぐる社会の動きも含めて、解説していただきました。

第Ⅰ部では、「一生の土台となる子どもの栄養」と題して、生活習慣病予防、エピジェネティクス、授乳・離乳の支援ガイド、サルコペニア、肥満とやせの問題、腸内細菌叢に関すること、食事摂取基準の理解と活用、スポーツと栄養について紹介していただいています。

第Ⅱ部では、「生活のなかの栄養」と題して、生活のなかでの食事の位置づけ、学校給食、便通と食事の関係、摂食機能に課題がある子どもへの支援、障害のある子どもとの生活、小児栄養分野推進合同協議会の活動、栄養士の認定制度、貧困問題、世界の子どもの栄養事情、プラネタリーヘルスダイエットについて、紹介していただいています。

第Ⅲ部では、「病態別の栄養治療」について、新生児、集中治療、先天性心疾患、小児・AYA世代のがん、腎疾患、短腸症候群、摂食障害、食物アレルギー、先天代謝異常症を、それぞれ解説していただいています。

第Ⅳ部では、「多職種で行う栄養サポートの実際」と題して、小児科医師、管理栄養士、看護師、薬剤師、歯科医師、歯科衛生士、リハビリテーションスタッフの役割について、論じていただいています。

第Ⅴ部では、「小児栄養をどのように学ぶか」と題して、入門書、コンセンサス、食べることが困難な子どもの栄養サポートについての参考書、医療的ケア児・重症心身障害児の栄養サポートの参考書、国内の材料と海外の材料を紹介いただき、最後に欧州臨床栄養代謝学会の生涯教育プログラム、LLLの紹介をしていただいています。

小児の栄養について、特に基礎疾患を抱える小児に対する栄養治療についての情報は15年前には非常に限定的でした。今では非常に多くの情報にアクセスできる時代となったことはありがたいことです。それでもまだまだ現場では最善の栄養が普及しているとはいえないと思います。Nutritional care is a human right. すべての子どもに適切な栄養ケアが行き届くようになるために、本書を十分に活用することが、1つのきっかけとなってくれればと願ってやみません。